

トルコ語の指示詞 — “şu” 系列指示詞の機能を中心に — Turkish Demonstratives -Focusing on “şu” Series-

BALPINAR, Metin

岡山大学社会文化科学研究科

要 旨

現代トルコ語には、bu、şu、o に代表される3つの指示詞がある。近年、これらの用法を体系的に捉えつつ、その機能を明らかにしようとする試みが幾つか見られる。しかし、その中で提案されている説では şu の用法をうまく説明できないようなデータが存在する。従って、本稿ではデータ分析を従来例外とされてきた用例の範囲まで広げ、şu の多義性に統一的な説明を与えることを試みる。また、şu は時間的のみならず心理的にも近称の指示詞であると主張する。

キーワード：トルコ語、指示詞、共通の空間、心理的距離、時間

1 はじめに

現代トルコ語には、日本語のコ・ソ・アと同様に、それぞれ近称・中称・遠称と呼ばれる3系列の指示詞がある(表1を参照)。これらの形は指示詞語幹 bu、şu、o からの派生形であると考えられており、指示形容詞と指示代名詞という2種類に分けて区別されている。

表1 トルコ語の指示詞

	bu 系列	şu 系列	o 系列
これ/それ/あれ、この/その/あの	bu	şu	o
ここ/そこ/あそこ	bura/burası	şura/şurası	ora/orası
こう/そう/ああ	böyle	şöyle	öyle
こんなに/そんなに/あんなに	bunca	şunca	onca

(林2008: 217)

これらの使い分けに関する研究は数少なく、その中で特に şu の用法が未だ充分解明されているとは言えない¹。従って、本稿では şu の機能を明らかにしつつ、その多様な用法に統一的な説明を与える

* 本稿の執筆にあたり、和田道夫先生、宮崎和人先生、栗林裕先生に貴重なコメントをいただきました。また、トルコ語の例文に関しては兄 BALPINAR, Zafer; 友人の ERAL, Murat と GÜROL, Abdurrahman に判断をもらいました。ご協力いただいた方々に感謝の意を表します。

¹ şu のみならず o の用法に関しても検討する必要があるが、原稿のページ数による制限などの理由で、それを今後の課題にしたいと思う。

ことを目指す。また、本稿では、林(2008)の「şu は時間的に近称の指示詞である」という意見をさらに進めて「şu は心理的に近称の指示詞である」ということを提案する。なお、本稿では şu に厳密な意味で文脈指示の用法は存在しないと考える。何故ならば、指示対象がその場になく場合、şu は言語的コンテクストによって導入された先行詞と言語的關係を持つことができないからである²。

論の進め方としては、まず第2節で表1に示されたトルコ語の指示詞がこれまでどのように説明されてきたかということをもとめる。第3節では şu によって指示されるものは対話者たちに特定可能なものであり、かつ共有可能なものであるということを示し、第4節では şu の派生的意味に触れる。続く第5節では şu は心理的に近称の指示詞であるということを主張する。最後に本稿での議論をまとめる。

2 トルコ語の指示詞における先行研究

トルコ語の指示詞の先行研究は大別すると、その使い分けに関してあまり詳細な記述がなされていない文法書の研究と、bu, şu, o の用法に精密な分析を行った研究に分類することができる。

2.1 文法書の中で説明されてきたトルコ語の指示詞

これまでの解釈では、bu, şu, o の用法は (A) bu は話し手に近いもの(近称)を、şu は話し手から少し遠いもの(中称)を、o は話し手から遠いもの(遠称)を指示するのに用いるという説明が最も広く見られる(Lewis 1967、飯沼 1995、Ergin 2002、Banguoğlu 2004、Kornfilt 1997)。また、(B) 話し手の近くにあるものを bu、聞き手の近くにあるものを şu、他者の近くにあるものを o で指示するという説もある(Kissling 1960)。

さらに、(A) の説明を基準にしているものの şu と o を区別する上で「対象が見えるかどうか」という基準を用いる解釈も存在する(Jansky 1943、Peters 1947)。その場合、şu は話し手から見えるもの、o は話し手から見えないものを指示するのに用いるという。また、Underhill (1976) はジェスチャーという規準に基づいて、şu で指示されるものはジェスチャーを伴う場合であり、bu 又は o で指示される

² 本稿では、şu の機能に関する問題を考える時に、トルコ語の指示詞体系全体の中に şu をどう位置づければいいのかという問題も含めて考える必要があると思っている。それは、トルコ語における指示詞体系はその全体像が未だ充分明らかにされていないからである。従って、以下の (i) のような場合に şu を用いることができないということを報告しておきたい(このような場合 bu も使用不可能である)。

(i) Nerede ölürsem, beni [ʔburaya/ʔşuraya/oraya] gömün. (Ögüt 2004:205) (|| 内の表示は筆者による)
どこで 死ねば 私を そこに 埋めろ (貴方たち)
私がどこかで死んだら、そこに私を埋めてもらいたい

どこ (x) (x で死ねば、私を x に埋めろ)

(i) で o によって標示されている対象 (x = 場所) は特定の対象をあらわしておらず、数多くの対象の中で特定できない一つの対象に相当する値をとる。この言語現象はいわゆる束縛変項と呼ばれるものであり、bu と şu には見られない用法である。この bu, şu 対 o の間に見られるコントラストは、bu, şu には厳密な意味での文脈指示用法が存在しないと考えることによって説明できると考えている。

ものはジェスチャーを伴わない場合であると述べており、かつ bu は話し手に近いもの、o は話し手から遠いものを指示するのに用いるとしている。

しかし、上のいずれの解釈でも説明できないデータが存在する(反論・反例に関しては林1984、1989、2008を参照のこと)。以下の研究は、そのようなデータに適切な説明を与えようとするものである。

2.2 トルコ語の指示詞を対象とした研究

以下では、bu,şu,o の用法を対象にした研究(林1984、林1989、Özyürek 1998、Küntay and Özyürek 2006、西岡2006、林2008)をまとめておく。

2.2.1 林(1984、1989)

林(1984、1989)は、話し手に近い(空間的・時間的・心理的)ものを bu、話し手から離れているもの³を o で指示するということで bu と o の区別に関してあまり問題はないとし、一方 şu については bu と şu の両方、あるいは o と şu の両方を用いることのできる場面が多いため、問題も多いとしている。そして、林(1989)に次のようなものが挙げられている。

(1) (A、B 2人の会話)

- A: Sizin okumak istediğiniz kitabı getirdim.
 あなたの 読み たがっていた 本を 持ってきました(私は)
 B: Bun-u /On-u ne zamana kadar ödünç alabilirim?
 これを/それを いつ まで 借りられますか(私は) (林1989: 98)

(2) a. (話し手が聞き手の後方を示しながら)

- Aa şun-a bak, Hasan geliyor.
 おや それを 見ろ, ハサンが 来るよ

b. (話し手が聞き手の顔を指しながら)

- Şu suratının haline bak.
 この お前の顔の 有様を 見ろ (林1989: 99)

(3) a. Hasan'a şun-u söyleyeceğim, "Anneni meraklandırma." ハサンに これを 言うつもりです(私は) 「君の母親を心配させるな」

³ 林(1989)によると o で指示されるものは、「聞き手に属するものを含めて話し手から離れているもの (p.98)」である。

b. Bugün ders yokmuş ama, bun-u hiç bilmiyordum.

今日 授業は ないそうです が これを 全く 知りませんでした(私は)

(林1989: 100)

(1)(2)のような現象をもとに林(1984, 1989)はbuで指示されている対象について聞き手が既に気付いているとし、またşuで指示されている対象について聞き手が未だ気付いていないとしている。さらに、このことから林(1984: 57)は次のような一般化を行う。

(4) bu 話し手に近く(空間的, 時間的, または心理的に), 既にディスコース⁴に導入されている, と話し手が見做している対象を指示。

o 話し手から離れており, 既にディスコースに導入されていると話し手が見做している対象を指示。

şu 未だディスコースに導入されていないと話し手が見做している対象を指示。

そして、上記のような使用条件によって(3)のような用例もうまく説明できるという。また、林(1989)は以上の一般化と共にşuの用法に関するもう一つの点を示唆している。

şuによって指示される対象は、聞き手が容易に発見できるように、話し手や聞き手の近くにある目に見えるものであることが思われます。şuが多くの場合対象を指し示す身ぶりを伴うのも、やはり聞き手の認識を助けるためなのでしょう。buやoを含む名詞句に比べşuを含む名詞句が修飾語をより自由に取れるのも、聞き手の認識を助けることと無関係ではないと思います。

(林1989: 100)

そして、şuの使用条件としては(4)の一般化に次の条件も付加されている。

(5) 指示対象は、şuを含む発話と同時に、聞き手によって同定⁵されなければならない。(林1989:100)

2.2.2 Özyürek (1998)、Küntay and Özyürek (2006)

Özyürek(1998)は、自然な状態での会話記録と面接調査に基づくデータの分析を行い、şuの使用に関しては聞き手の視覚的注目(visual attention)が対象にない場合に用いられるのに対し、bu及びoは聞き手の視覚的注目が対象にある場合に用いられるとしている。また、bu(近称)及びo(遠称)は話

⁴ ディスコースとは対話者たちがお互いに共有していると思い込んでいる場面及び文脈に関する知識である(林1984: 57)。

⁵ 林徹先生の個人的な談話によると「同定」というのは、şuを含む発話と同時に、会話に関するそれまでの知識とか文脈とかの助けを借りることなく、聞き手は指示対象が何であるかを認知できることである。

し手から指示対象までの距離に基づくものであるものの、*şu* は指示対象までの距離に関係なく用いられる(The Turkish demonstrative *su* does not encode a spatial semantic distinction, p.613)と主張している(第5節を参照)。

Küntay and Özyürek (2006)は、Özyürek(1998)による結果がトルコ語母語話者の幼児(4-6歳)と成人(大学生)との間でどう違うのか、ということを実証的に考察している。レゴの作品の写真を見本に、それをレゴで実際に再現するタスクにおいて、*bu* 及び *o* の使用は成人と幼児の場合話し手からの距離に関係していること、一方 *şu* の使用は成人の場合聞き手の視覚的注目の有無に関係しているのに対し、幼児の場合視覚的注目の有無に関係なく *bu* と同じく話し手に近い対象を指示するのに用いることが示されている。また、成人の場合、*o* の使用も聞き手の視覚的注目の有無に関係していると指摘されている。*şu* の使用に比べ、*o* の使用が聞き手の視覚的注目が対象にある場合により多く用いられるという。

2.2.3 西岡(2006)

西岡(2006)は、ウズベク語・カザフ語・新ウイグル語・トルコ語・アゼルバイジャン語の指示詞の機能と体系を記述することを目標とする研究である。そこで西岡(2006)は、指示用法を「発話現場において指示対象が知覚可能か否か」という規準でまず現場指示用法及び非現場指示用法⁶に二分割する。また、「談話内で当該の指示詞より前に、同一の指示対象を表す言語表現が必要か否か」という規準を用い、非現場指示用法をさらに独立指示用法及び非独立指示用法に分けて、指示詞の機能を探る。

トルコ語の指示詞に関して西岡(2006)は、現場指示用法の *bu・o* はそれぞれ近称・遠称であり、かつ導入済み要素の指示であるとし、*şu* は要素を談話へ新規に導入するために用いられるとしている⁷。また、非独立指示用法の *bu・o* はそれぞれ「対話相手の発話全体を指示」・「対話相手の発話内の構成要素を指示」であり、かつ導入済み要素の指示であるとされ、*şu* は現場指示用法の *şu* と同じく要素を談話へ新規に導入するために用いられるとされている。

2.2.4 林(2008)

林(2008)は、*şu* の使用法に関して、これまで試みられてきたさまざまな説明を統一的に捉えるために、a) *şu* による指示が極めて短期間のうちに達成されるということと、b) *şu* によって導入された対象は再び *şu* によって指示されることがないということに焦点を当てる。そして、後者の状況について

⁶ 西岡(2006: 6)は、「発話現場において指示対象が見える、聞こえる、触れることができる、など知覚可能な場合の用法」を現場指示用法とし、「発話現場において指示対象が見えない、聞こえない、触れられない、など知覚不可能な場合の用法」を非現場指示用法としている。

⁷ 金水他(2002: 241)は *şu* の機能に関して「対象を談話に新規導入する標識であることは明らかである」と述べている。

次の例を挙げている。

- (6) şu güzel, şu da güzel, ama şu en güzel.
 これ よい これ も よい しかし これ 最も よい
 「これはいいね、これもいいね、でもこれがいちばんいいね。」(林2008: 227)

林によると、この例は話し手と聞き手が目の前のテーブルに置いてある10個程のイヤリングの中から3つの異なるイヤリングを次々と指示しつつ、隣にいる聞き手に話しかけるという状況であるという。このように、「1回の発話に複数のşuが現れる場合、指示対象は全て異なっていなければならない」と林(2008: 226)は指摘している。つまり、şuが発話された後は、同じ指示対象をşuで指示できないということである。

以上の現象と、şuの指示対象は発話される直前まで聞き手によって特定されていないということから、林はşuとその指示対象との結びつきに関して「発話時のみ、あるいは発話時を中心としたごく短い時間内にしか成立していないということになる(p.227)」としている。

以上のことから、林(2008)はşuが時間的近接性を表す指示詞であるという結論を導き出し、「buが空間的に近称の指示詞であるならば、şuは時間的に近称の指示詞ということになる(p.228)」と指摘している。また、同じところで、şuの機能は『şuによって話し手は「今の私に注目して指示対象を特定せよ」と聞き手に要求しているのではないか」と主張している。

以上、2.2ではトルコ語の指示詞を対象とした研究をまとめた。その中で、林(1984, 1989)、Özyürek (1998)、Küntay and Özyürek (2006)、西岡(2006)、林(2008)の中心的な問題としては、本論文第4節で指摘する一見例外のように見える用例をどう説明すればいいかという点が挙げられるだろう。また、şuにおける多様な用法をどのような形で統一的に捉えることができるかという問題も残る。従って、次節と第4節ではこれらの問題点に関して検討することにする。

3 şuで指示されるものの特徴

林(1989: 100)は şu で指示される対象について「聞き手が容易に発見できるように、話し手や聞き手の近くにある目に見えるものであることが多いのだらうと思われます」と述べている。この指摘は、以下の(7)(8)においても容易に確認できる。

- (7) (話し手は自分の鼻を指し、聞き手に対して)

Bak-in [*bu/şu/*o] benim burnu-m-da bir şey var mı?
 見ろ-2人称複数 この 私の 鼻-1人称単数-位格 一 もの ある 疑問形
 見て、私のこの鼻に何か付いていますか? (Ögüt 2004: 100)

- (8) (診断室で医者は患者のすぐ隣にある診断用のベッドを指して)

[?bu/ʃu/*o]-nun üzer-i-ne uzan, hemen başla-ya-lım
 それ-属格 上-3人称単数-与格 横になる すぐ 始める-意志形-1人称複数
 iste-r-se-n.
 望む-アオリスト-假定形-2人称単数
 そのベッドに横になって、もしよかったらすぐ始めましょう。(Eldem 2004: 379)

(7)では話し手の鼻、(8)では聞き手の隣にある診断用のベッドが ʃu で指示される。この場合、指示対象は聞き手が容易に発見できるように、話し手や聞き手の近くにある目に見えるものである。また、(7)(8)の指示対象は、話し手の ʃu を含む発話の瞬間に聞き手によって特定される。これらの現象から、発話現場において聞き手にも特定可能なものであると話し手が認めた対象を ʃu で指示するということが分かる。

では、特定不可能な指示対象が発話現場に存在している場合 ʃu が使用できるのだろうか。(9)を見ていただきたい。

- (9) (テーブルの上に、手を伸ばせば、手に持つことができる距離に箱があるとする。この場面において、いきなり箱の中で何かが動き出し始める時、その中にある目に見えないものを指示して)

Aman tanrım! [?bu/*ʃu/ o] da ne!
 おお (私の)神 これって 何
 おお神よ! 一体これって何なんだ!

この例に関しては、先ず bu も自然であるとする話者が存在することは報告しておく必要がある(この場合、bu は箱そのものを指しているとする話者もいる)。と言っても、(9)では o は問題なく用いられるのに対して、ʃu が用いられないのも事実である。遠称の o が選択されるのは、話し手が驚き・恐怖のあまりか、そのものをできるだけ自分から遠ざけようとする意識が働いているからであると思われる⁸。次に、(10)の場合を考えてみよう。

- (10) (部屋の中の人々がノックの音に対して)

Kim [?bu/*ʃu/ o]?

⁸ この場合、トルコ語では o を用い、日本語ではコレを用いる。このことから、指示がトルコ語では心理的な距離に基づいて成立するのに対し、日本語では空間的な距離に基づくということが導き出される。

誰 あれ

(直訳) あれは、誰? (金水他 2002: 242, fn.7) (| | 内の表示は筆者による)

(10)では、ドアがノックされたため、向こうに誰か又は何かがいるということを前提に、話し手はその対象を *o* で指示している。しかし、その存在は話し手にとって特定不可能なものであるため、*şu* で指し示すことができない。従って、特定不可能な指示対象が発話現場に存在する場合、*o* が用いられるのに対して *bu* 又は *şu* が用いられないことが、(9)及び(10)における用例から容易に窺われる。

さて、対話者たちに特定可能な対象が発話現場に存在しない場合を考えてみよう。

(11) *Şu* bizim Ahmet çok çalışkan...

この 我らが アフメットは 大変 勤勉です (林 1989: 101)

ある社会共同体・団体・集団に属するものに関する共有の知識が指示を決定付ける要因となる場合がある。例えば、(11)の Ahmet という人物は話し手 A と話し手 B にとって特定の場所にいる特定の Ahmet を示す。より具体的に言えば、話し手 A-B が大学院生であり、同じ研究科に Ahmet という長い付き合いの友人がいたとする。もちろん、話し手 A-B にそれぞれ別の Ahmet という友達がいる。しかし、(11)の文脈が話し手 A によって発せられた時点で、話し手 B は夜遅くまで研究に没頭している姿を見せる(話し手 A も毎晩目撃しているはずの) Ahmet しか思い出せない。もちろん、Ahmet は発話の場面に存在しないため、話し手 A は話し手 B が指示対象を特定するのを助けようとする。そのために、*bizim*/*çok çalışkan* という表現を用いてさらに Ahmet という対象を限定しようとする。そうすることによって、話し手 B は話し手 A と共に何でも分ち合ってきた、勤勉な Ahmet しか思い出せないであろう。このようなケースにおいては、指示対象を限定する表現が用いられない場合、その対象はその場面に存在していないため、話し手 B が対象を特定するのに困難が生じるのであろう。

従って、発話現場に存在しない(観念の場面に存在する)特定可能な対象が指示の対象となる場合(11)、トルコ語では限定表現の付加が必要となる(収集されたデータの中で、指示代名詞の *şu* のみで対象を指示するケースには見当たらなかった)。一方、発話現場に存在する特定可能な対象が指示される場合(7-8)、言語外の状況(ジェスチャー、視線など)が聞き手の対象特定の助けとなることが多い。上記の状況から分かるように、(7-8)及び(11)の共通点は、指示対象は *şu* という発話瞬時に聞き手によって特定されるということと、*şu* を含む文脈が話し手によって発せられる以前から発話現場の特定可能な事物又は観念の場面に存在する特定可能な事物が対話者たちによって共有されているというこ

とである^{9,10}。従って、*şu*の使用条件を次のように一般化することができる。

- (12) その場面(現場及び観念の場面)において聞き手にも特定可能であり、かつ共有可能であると話し手が認めた対象に未だ聞き手が気付いていないと、話し手が見做している場合に*şu*を用いる¹¹。

4 *şu*の派生的意味

前節では(7-8)及び(11)のような状況から、*şu*の用法に関して(12)における一般化を行った。本節では、これまでの解釈・研究の中で見てきた*şu*を(例外とされてきた用例も含めて)(12)の条件で首尾よく説明できるということを示す。まず、前節の(7-8)のような場合を考えてみよう。

- (13) (話し手Aは部屋の中で立ち話をしているときに、窓から外にある建築物を指差して話し手Bに)

A: Gör-üyor mu-sun |*bu/*şu/o|-nlar-ı ?...

見る-現在形 疑問-2人称単数 あれ-複数形-対格

あれが見えるかい?

B: Heps-i-ni ben yap-tı-m |*bu/*şu/o|-nlar-in.

全て-対格 僕 作る-過去形-1人称単数 あれ-複数形-属格

あれの全ては僕が作ったんだ。(Türkali 2004: 63)

(13)では、指示したら聞き手にもすぐ発見できると話し手が見做しているもの(窓から外にある建築物)が指示の対象となる。つまり、指示対象は聞き手にも特定可能であり、かつ共有可能なものであるということである。このようなものに聞き手Bがまだ気付いていないと話し手が判断し、それを*şu*で指し示す。そして、指示対象の談話への導入が済んだところで、今度話し手Bは同一の対象を*o*で

⁹ 林(2008: 226)は「*şu*が発話される直前までは、聞き手は指示対象に気づいていないが、*şu*が発話されると同時に聞き手によって指示対象は同定され、指示対象に関する知識が話し手と聞き手により共有される」としている(同様な指摘は林(1984, 1989)にも観察される)。簡単に言えば、指示対象は*şu*により指示された直後、対話者たちにとって共有のものになるということである。一方、本稿では、(場所的・心理的)スペースの中で事前に存在するものが対話者たちに共有されるものであると考える。要するに、ある場面が設定され、そこに話し手と聞き手が居る場合、「指示したら聞き手にも直ぐ発見できる」と話し手が認めたものが(発話現場の事物か或いは対話者たちの内面的世界の場面にある事物)対話者たちに共有可能なものである(かつ特定可能なものである)ということである。発話者はこのような共有可能・特定可能なものを材料に、談話を変化させていくことができると思う。

¹⁰ 本稿で言う「特定」は、林(1984, 1989)が言う「同定」と根本的に違う概念である:「特定」は場面や文脈に関する知識を前提とするのに対し、「同定」は場面や文脈に関する知識を前提としないものである(「同定」に関してはfn. (5)を参照のこと)。

¹¹ 聞き手が指示対象に気付いている場合でも、聞き手がその対象の存在に実際に気が付いているかどうかということ十分に確認するために、話し手は*şu*を用いるということが別の可能性として考えられる。

指している。

一方、指示対象(首)が話し手 A 及び話し手 B の意識にすでに上っているのに対して şu が用いられているという点で、次の(14)は(12)の条件に違反しているようにみえる。

- (14) (話し手 B は話し手 A に無理やりマッサージをしている場面で)

A: Bırak boynum-u

放せ (私の)首-対格

俺の首はそのままにしておきなさい。

B: İyice bir yoğur-a-yım.

よく 一 揉む-意志形-1人称単数

よく揉んであげよう。

A: Laf anla-maz mı-sın, bırak [*bu/şu/*o] boynum-u

話 分かる-否定形 疑問形-2人称単数 放せ その (私の)首-対格

分からないのか、そこはそのままにしておきなさい。(Öğüt 2004: 117)

しかし、話し手 A は自分の首をそのままにしておかない話し手 B に腹を立て、命令文を含む発話の中で強く発音しつつ対象(首)を şu で指示している。このような場合、話し手 A はまるで聞き手が指示対象に気付いていないかのように捉えることによって、話し手 B に対してその対象に関する強調(注目を指示対象に集中せよ)といった意味的なニュアンスを与えることができると考えられる。バルプナル(2006)で指摘しているように、このような şu は命令文・感嘆文の中で現れることが多い。それは、林(2008)による以下の例においても確認できる。

- (15) (話し手が自分の肩に虫が這っているのに気付く、聞き手にすぐ払ってくれるよう頼む)

at şun-u (?bun-u / ?on-u).

すてる これ-を

「とりはらって、これ！」(林 2008: 228)

トルコ語の文脈には感嘆符が付いていないが、(15)の「at(とりはらえ)」は命令というより聞き手の感嘆・感動を呼び起こす表現として使用されていることが窺われる(和訳に感嘆符があることに注意)。この例に関して林(2008)は、指示対象(虫)に関する聞き手の認識状態(聞き手が対象に気付いているかどうか)には触れていないが、指示対象に聞き手が気付いていないと話し手が見做している場合、(12)の条件により şu が問題なく用いられるということが分かる。また、聞き手が指示対象に気付いていると話し手が見做している場合でも、前例の(14)と同じく、虫にまるで聞き手が未だ気付いて

いないかのように捉えることによって、その対象に関する強調といった意味的なニュアンスを聞き手に与えることができると考える¹²。

以上のことから、(14) (15)のような用例は、(13) (又は7-8)のような使用から導き出された(12)の原則の拡張であると言えることができる¹³。

次に、前節の(11)の場合を考えることにする。

- (16) (話し手は聞き手とヤークップという男について話し合った直後、隣にいる部下に次のように命令を下す)

Git [*bu/şu/*o] Efraim-e bir soruştur bu Yakup denen adam-ı
行く あの エフライム-与格 ー たずねる この ヤークップ という 男-対格
あのエフライムのところへ行って、このヤークップという男のことをちょっと訊いてみろ。

(Eldem 2004: 65)

話し手もその部下も、(16)の場面が設定された時点より前に、エフライムという人物に関する知識を共有している。言い換えれば、第3節において既述した発話現場の場合と同様に、内面的世界の対象(エフライム)も対話者たちに共有可能なものであり、かつ特定可能なものであるということである。このような場合、話し手は部下が未だ気付いていないと見做した対象をşuで示す。

- (17) (マンションの居住者がマンションの色々な問題に関して相談している場面である。

話がある程度まで進んだ段階で、管理人は)

Demek [*bu/şu/*o] nokta-lar üzerinde anlaş-mış
では 次の 点-複数形 に関して 同意する-過去形
bulun-uyor-uz: Duvar-lar ve çatı onar-ıl-acak.
補助動詞-現在形-3人称複数 壁-複数形 と 屋根 修理する-受身形-未来形
それでは、次のことに関してはみんな意見が一致していますね。とりあえず、壁と
屋根の修理が必要だということですね。(Türkali 2004: 31)

¹² 林 (2008) によれば、この例では一応いずれの指示詞も使えるという。詳細な検討が行われていないが、oを用いると、例 (9) の場合と同じく、あまりの驚き・恐怖に話し手がおびえてしまい、そのものをできるだけ早く自分から遠ざけようとする気持ちが働くのではないと思われる。また、buを使うと、話し手は自分に近い虫の排除を冷静な感じで聞き手に伝えることになるだろう。

¹³ バルプナル (2006: 33-35) で筆者自身が、(14) のような用例は (13) のような用例からの派生として説明できるということに触れている。本稿もバルプナルと同じ立場である。しかし、本稿で使用されているşuの使用条件(12) はバルプナル (2006) で設定されたものと異なる。

(17)ではコロンの直後に続く文脈そのものがşuの指示対象となる。この場合、マンションが抱えている幾つかの問題が話し合われるが、それらは特に特定されることなく、漠然とした知識の対象として対話者たちの記憶に残る。とすると、(17)においてもşuという発話の前に、指示対象に関する情報が前例の(16)と同じく対話者たちに共有可能なものであり、かつ特定可能なものであると考え得る。このような場合においても、聞き手は指示対象の存在にまだ気が付いていないと話し手が判断し、şuで指示するのである。

以下の(18)は、(17)と同じく、コロンの後に来る文脈がşuで指示される。しかし、(18)は、指示対象に関する情報がşuという発話の直後始めて聞き手に提供されるという点で(17)の状況とは異なる¹⁴。つまり、şuの直後に現れる文脈が聞き手にとって特定不可能・共有不可能な対象ということである。

- (18) (Aさんの父親の住所に他人からAさん宛てに不審な小包が届くが、その住所はAさんが勤めている会社にある個人ファイルにしか記録されていない。さらに、Aさんはその住所にはもう住んでいない。この話を友人のBさんにした後、Aさんは自分の個人情報が外部にもれているかもしれないと不審に思いはじめ、聞き手に)

Bura-da rahatsız ed-ici nokta [ˈbu/ʃu/ˈo]: O kayıt-lar gizli-dir,
 ここ-位格 気に掛かる-連体形 点 これ その 記録-複数形 秘密-確定
 dışarı-dan kimse bak-a-maz.
 外部-奪格 誰も 見る-意志形-アオリスト(否定形)
 そこで気に掛かるところはこれだ：その記録は秘密扱いされている。外部から誰も見る
 ができない。(Eldem 2004: 210)

しかし、(18)のような場合、話し手はşuを用いることによって指示対象をまるで聞き手に特定可能なものであり、かつ共有可能なものであるかのように捉えることができる¹⁵。そうすることによって、話し手は聞き手との間で指示対象に対する心理的な一体感¹⁶を作り出すことができ、聞き手を談話に引き込むことができるのである。

以上、(13)(16)のような状況と(17)(18)を比較すれば容易に分かるように、前者の場合、指示対象はşuという発話と同時に聞き手により特定できなければ、対話者たちのコミュニケーションに困難が生じる可能性があるのに対し、後者の場合、指示対象はşuの直後に聞き手により直ぐ特定できるため

¹⁴ (18)ではşuで指示される対象が聞き手によって事前に推測できないわけではない。しかし、本稿ではEldem (2004)に著述されている文脈に関する情報をもとに議論を進めていくことにする。

¹⁵ この場合、şuを用いることによって話し手は、それが意味している言語的行為を引き起こすことができると考える。

¹⁶ 話し手・聞き手・指示対象の「心理的な一体感」という概念については第5節を参照にいただきたい。

そのような問題はない。(17)(18)と同じようなことが次の(19)についても考えられる。

(19) (聞き手に履歴書の書き方を教える場面で)

Mesela, şu tarihte şu şehirde doğdum, şu tarihte şu ilkokula
 例えば いついつに 何々 市で 生まれた(私) いついつに 何々 小学校に
 girip, şu tarihte bitirdim, gibi yazılır.
 入学し, いついつに 卒業した, のように 書かれます (tarih 日付) (林 1989: 101)

(19)では指示は行われているものの、指示される対象は一見存在していないかのように見える。しかし、このような場合においても、話し手(又は聞き手)は記憶の特定可能な対象の中から特定の一つを選び出し、それを şu で指し示す。要するに、指示の対象となっているものは、話し手自身の生年月日・出身地・小学校入学日などの情報、知人又は友達の個人情報、或いは共有可能である対話者たちがお互いに思い込んでいるいかなる情報(生年月日・出身地・小学校入学日など)ということである。話し手はこのような対象を şu で指示することによって、前例(18)と同様に、聞き手との間で指示対象に対する心理的な一体感を作り出すことができると考える。

以上のことから、(17)(18)(19)に関しては(16)のような用法からの拡張であり、従ってこれらの場合でも(12)の原則の拡張であるということが導き出される。

5 共通の空間・心理的な近接性と şu の用法

前節では、(12)の条件を用いることによって、şuにおける多様な用法に統一的な説明を与えることが可能であるということを観察してきた。そこでは、şuで指示されるものは、話し手にも聞き手にも特定可能なものであり、かつ共有可能なものであると述べた。本節では、前例(18-19)の解説に用いた「心理的な一体感」とはどういうことを表しているか、「共通の空間」という概念との関連で具体的に見てみることにする。また、şuは時間的に近称の指示詞であるという林(2008)の提案を一步前進させ、şuは心理的にも近称の指示詞であるということを主張する。

これまでの研究では、同一の話者は şu で指示した自分に近い同一の対象を bu とも指示できるという(20)、また şu で指し示した自分から遠い同一の対象を o とも指示できる(21)という主張が見られる(Özyürek 1998, Küntay and Özyürek 2006)。

(20) 1.0 Student 1 Hangisi 20 puan daha fazla aldı?

Which 20 points more took?

Which one took 20 more points?

(どちらの方が20ポイント以上を取りましたか)

1.1 Teacher su¹⁷

this/that

(これ/それ)

1.2 Stud.2 pointing at another object in silence

(黙って別のものを示して)

1.3 (Teacher) o mu aldi?

that Q got?

That one got it?

(あれが取りましたか)

1.4 (Teacher) ha ben bu dedim ama

ohh I this said but

ohh!but I said this one

(私はこれだと言いましたけど) (Özyürek 1998: 610-611) (括弧内は筆者による)

(20)では学生は先生にどちらの絵画が20ポイント以上を取ったかを訊く(1.0)。そして、先生は回りにある二つの絵画(一つは先生から近く、もう一つは先生から遠い)のうち近いのを選び、suで指す(1.1)。一方、他の学生が黙って遠くにある別の絵画を指し示す(1.2)際に、先生は自分から遠いその絵画をoで指し示す(1.3)。次に、先生は最初に示した絵画に戻るが、今度は同じ事物をsuでなくbuであらわすという。この現象から、Özyürekは相対的距離が変わらないのに対して、同じ人物が同じ事物をsuともbuとも指示できるとしている。

(21) 2.1 Student mesela hocam su oval mesela

for example sir this/that oval for example

sir for example, this/that oval for example

(例えば先生、あの楕円形のものですが)

2.2¹⁸

sunun dış yüzeyine koyup ta

this/that-GEN out surface-POSS-DAT put

if you put on this/that's outside surface

(あれの表面に置いておけば)

¹⁷ Özyürek (1998) は「su」を「su」であらわしている。本稿では、この二つの形式に関する混乱を避けるために (20) (21) の用例に限って「su」を「su」としてあらわすことにする。

¹⁸ 2.2のsuに関して Özyürek (1998) は、何を指しているか又は誰(話し手・聞き手・第三者)によって発されているかということに触れていない。

2.3 (Student) ondan da olabilir

that-ABL also be

it might be from that too

(あんなものもよさそうです) (Özyürek 1998: 611-612) (括弧内は筆者による)

(21)では、先生は陶器が置いてある同じテーブルに学生達と一緒に座り、その陶器について話し合っている場面である。しかしながら、テーブルから離れている、部屋の中にある他の陶器が時々話題になることもある。その時、一人の学生がテーブルから一番遠いところにある陶器を *su* で指し (2.1)、2.3 においてそれを *o* で指し示すという。そして、この例から Özyürek が導き出したのは、*su* が *o* の代わりに用いられるということである。

以上の言語現象をもとに、Özyürek (1998) は *bu* 及び *o* と、*şu* との間の相違が聞き手の視覚的注目 (visual attention) の有無に関係しているとし、話し手から指示対象までの (具体的な) 距離に関係なく *şu* が用いられると主張する (2.2.2 節を参照)。

上記の主張が正しいとすれば、下の (22b)¹⁹ において *şu* を使ってもいいということになるが、この例では *o* しか用いることができない。この場合、どうして同一の対象を *şu* で指示することができないのだろうか。

- (22) a. (聞き手が話し手のすぐ隣にいる場で、話し手が聞き手の腰にあるバッグに触って)

Hasan, [bu/şu/*o] çanta-da ne var?

ハサン、この バッグ-位格 何 ある

ハサン、(あなたの)このバッグの中に何があるの?

- b. (話し手が大声を出さない限り聞き手が聞こえない程両者が離れている場で、話し手は聞き手の腰にしているバッグを指しながら、大きい声で)

Hasan, [*bu/*şu/o] çanta-da ne var!

ハサン、その バッグ-位格 何 ある

ハサン、(あなたの)そのバッグの中に何があるの!

(22a)では、隣にいる聞き手が腰にしているバッグを *bu* と *şu* とともに指示できる²⁰。一方、(22b)では同じバッグでも両者が離れている場合、*o* しか用いることができない。このことから、対話者たちがコミュニケーションに無理が生じる程離れているような場合、*şu* は使用できないということが窺わ

¹⁹ (22b) はやや特殊な状況でもあるが、*şu* を用いることができないと話し手が推測するに十分な状況である。

²⁰ この場合、*bu* は「話し手がバッグに触った」と聞き手が気付いた直後に用いるのに対して、*şu* は話し手がバッグに触ると同時に用いるというニュアンスがある。

れる。しかし、両者が離れている場合でも、şu が使用可能な場合もある。(23a)をご覧いただきたい。

- (23) a. (両者が遠く離れている場面の中で、話し手は遠くにある山を指して聞き手<Ahmet>に)

Ahmet, |*bu/şu/?o| dağ-a bak!

アフメット あの 山-与格 見ろ

アフメット、あの山を見ろ!

- b. (テーブルに並んで聞き手と話し合っている場面で、話し手はそのテーブルの上にある一枚の写真を聞き手<Ahmet>に示して)

Ahmet, |*bu/şu/*o| fotoğraf-a bak!

アフメット この 写真-与格 見ろ

アフメット、この写真を見ろ!

この場合 şu が使用できるのは、「指示対象が同じ条件で聞き手と共有できるものである」と話し手が判断しているからである。要するに、(23a)では指示対象(山)が話し手からも聞き手からも遠く離れており、話し手にも聞き手にもすぐに発見できるようなところにある。また、(23b)では、話し手は聞き手と同じテーブルに並んでおり、かつ指示対象(写真)が両者のすぐ目の前のところにある(このように、同様な条件で聞き手と共有できる空間のことを「共通の空間」と呼ぶことにする²¹⁾。従って、指示対象を聞き手とまるで共有しているかのような心理的な一体感を話し手は心中で作り出すことができると考える。このような場合、聞き手がまだ気付いていないと話し手が判断したそのような対象を şu で示すことは、その対象がすぐ眼前に現れるかのような印象を聞き手に与えることになり、それもまた指示対象に対する近接感を聞き手に与えることになる。

一方で、(22b)ではその近接感を聞き手に与えることはできないのは、指示対象が共通の空間内に存在しないからである。つまり、バッグは話し手から遠く離れており、かつ聞き手に近いため、その対象を聞き手とまるで共有しているかのような空間を作り出すことができない。このことは、話し手と聞き手とが同一の空間に共存しない、電話の場面においても確認できる。電話の場合、発話現場の対象は聞き手に特定不可能・共有不可能なものになるため、共通の空間を作り出すことには困難が生じる²²⁾。そのため、電話の場面においては話し手の発話現場のものを şu で指すことはできないのである。また、独り言の場合、şu がなかなか出てこないのも²³⁾、「共通の空間」の設定に必要な相手(聞き

²¹⁾ このご意見を下さった和田道夫先生に感謝申し上げます。

²²⁾ 相手の周囲の事物を確認することができるようなデバイス(3G機能が付いている携帯電話、ネットミーティングシステムなど)がある場合、şu が使用可能である。

²³⁾ 今回のデータでは聞き手がいらない場合に用いられる şu の用法は見当たらなかった。このような中称の şu と同様に、堀口(1978)も日本語の中称のソについて「我々の内言・独白などにおける知覚対象指示の用法を内省すると、コ・アを圧倒的に用いて、ソを用いることはきわめて稀だ、という事が思われてくる(p.112)」と述べている。

手)が存在しないからであろう²⁴。

共通の空間は回想された場面と結び付けられたものを指示の対象とする場合にも見られる(用例(11, 16)を参照のこと)。次の用例を見ていただきたい。

- (24) (話し手 A <女性>は話し手 B <男性>のことが好きであるが、そのことを話し手Bには言えない。このような状況で、話し手 A は以前一緒にいた女の子について話し手 B に聞く)

A: Haydi, hem yürü-ye-lim hem anlat.

さあ、副詞 歩く-意志形-1人称複数 副詞 話せ

[*bu/*şu/o] gör-düğ-üm kız mı?

あの 見る-過去形-1人称単数 女の子 疑問形?

さあ、歩きながら話して。(この前に私が)見たあの女の子ですか?

B: Evet.

はい。(Ögüt 2004: 71)

以前話し手 A が話し手 B の隣にいる女の子を見たことがあるとする(24)においては、指示が対話者たちの過去の共通の経験に基づいて行われているため、同様な条件のもとで聞き手と共有できる観念上の空間設定が可能となる。このような状況で、聞き手がまだ気付いていない、と話し手が見做している観念上の対象(話し手・聞き手に共有可能な「その女の子」)をşuで示すことによって、まるで指示対象が眼前に現れるかのような近接感を聞き手に与えることができる。もし、この考え方が正しいとすれば、前例(23)の場合と同じく、şu が選択されるはずである。しかし、(24)の場合使用されているのはoである。なぜなのか。

それは、話し手 A には(話し手Bが好きであるため)指示対象「その女の子」に対するライバル意識が働いていて、その対象をできるだけ自分から(時間的・心理的に)遠ざけようとするため şuではなくoを用いるのであると思われる。そうすることによって、話し手はまるで聞き手と共有していないかのように指示対象を扱うことができ、発話時から見て時間的にかつ心理的に遠い(過去の)存在であるという意味的なニュアンスを聞き手に与えることができる。そのような場合、şuを使うと、指示対象を時間的・心理的に自分に近づけようとすることになるため、反って不適切になる。

以上のように考えると、(24)の場合、şu を使用できるか否かということは話し手 A の心理的状況によるものであると見ることができる。実際、場面設定が(24)とやや異なっていて、話し手 A が話し手 B に対する感情を抑えるか、話し手 B に気がないか、又は「その女の子」のことを好ましい相手と認め

²⁴ Özyürek (1998) は詳細について述べていないが、şu は社会的・相互作用の意味 (social and interactive meaning) をエンコードするとしている。この主張は、本稿で導き出された「共通の空間」に関する意見と一致するものであると思われる。

る場合には、şu が使用可能となるのである。

以上の(22-24)における言語現象をもとに、şu は時間的のみならず心理的にも近称の指示詞であると考えることができる。林(2008)は、şu による指示が短時間のうちに達成されることから、şu は時間的に近称の指示詞であるという結論に辿りついている。

şu は時間的に近称の指示詞であるという林(2008)の主張を裏付けるものとして、şu an (只今、たった今)という時間的表現が挙げられる²⁵。これは、遠称の o と時間的に対立しており、「şu içinde bulunduğumuz an (たった今我々が存在している瞬間)」のように他要素の介入も可能であるため、イデオムである可能性はないと思われる。また、「bu an」とも言えないことから、şu は時間的に近称の指示詞であるということが窺われる。

従って、şu により指示されるべき対象は時間的・心理的に o が指示する対象の範囲とは相補分布の関係にあるということが導き出される²⁶。つまり、şu は時間的・心理的に近称の指示詞ということになる。

6 おわりに

本稿では、「共通の場所的・心理的スペースにおいて聞き手にも特定可能であり、かつ共有可能であると話し手が認めた対象が、未だ聞き手によって特定されていない、と話し手が見做している」場合に、şu が用いられると述べた。また、şu により指示される対象は時間的・心理的に話し手及び聞き手に近いものであるということを示した。このように考えることによって、従来説明できなかった şu の使用に統一的な説明を与えることができたと思われる。

しかし、本稿では bu 及び o の用法にはほんの少ししか触れることができなかった。トルコ語の指示詞を「bu・şu 対 o」という対立関係で捉えるのが可能であれば、bu 及び o の特徴を詳しく見る必要があるものと思われる。また、英語の定冠詞(the)と şu との類似性・相違性を検討してみる価値がある。対話者たちに特定可能であり、かつ共有可能であると話し手が認めたものは、英語では定冠詞(the)によって示されるからである。

参考文献

- 飯沼英三(1995)『トルコ語基礎』ベスト社
勝田茂(1986)『トルコ語文法読本』大学書林
金水敏・田窪行則(1992)『日本語研究資料集1 指示詞』ひつじ書房
金水敏・岡崎友子・吉美庚(2002)『指示語の歴史的・対照言語学的研究－日本語・韓国語・トルコ語』『シリーズ言

²⁵ 林(2008:228)はこのことに触れているものの、検討を行っていない。

²⁶ このような指摘から、şu が bu よりやや遠く o より近い対象を指示するという説明が生れたと考えられる。

- 語科学 4 対照言語学』東京大学出版会、217-247
- 西岡いずみ (2006)『現代チュルク諸語の指示詞の研究』九州大学大学院平成17年度博士論文
- 林徹 (1984)「トルコ語の指示詞」『アジア・アフリカ言語文化研究所通信53』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、55-57
- 林徹 (1989)「トルコ語のすすめ 3 - 「これ・それ・あれ」あれこれ」『言語18-1』大修館書店、96-101
- 林徹 (2008)「トルコ語の指示詞 *şu* の特徴」『東京大学言語学論集』第27号、東京大学文学部言語学研究室、217-232
- バルブナル・メティン (2006)『「BU,ŞU,O」の意味機能とトルコ語における指示詞体系について』麗澤大学大学院平成17年度修士学位論文 (未発表論文)
- 堀口和吉 (1978)「指示語の表現性」『国語学論説資料15-第4分冊』論説資料会、108-118
- Banguoğlu, Tahsin (1959 [2004?]) *Türkçe'nin Grameri*. Türk Dil Kurumu.
- Bastuji, Jacqueline (1976) *Les relations spatiales en turc contemporain; etude sémantique*. Paris: Éditions Klincksieck.
- Emre, Ahmet Cevdet (1945) *Türkçe'nin bugünkü ve geçmişteki gelişimleri üzerine gramer denemesi*. İstanbul, Cumhuriyet Matbaası.
- Ergin, Muharrem (2002) *Türk Dil Bilgisi*. İstanbul Üniversitesi Edebiyat Fakültesi Yayınları.
- Hayasi, T. (1988) 'On Turkish Demonstratives', *Tokyo University Linguistics Papers 1988*, Department of Linguistics, Faculty of Letters, University of Tokyo, 229-238.
- Jansky, Herbert (1980) *Lehrbuch der Türkischen Sprache*. Wiesbaden: Otto Harrassowitz.
- Kissling, Hans Joachim (1960) *Osmanisch-Türkische Grammatik*. Wiesbaden: Otto Harrassowitz.
- Kornfilt, Jaklin (1997) *Turkish*. London: Routledge.
- Küntay, Aylin C. & Özyürek, A. (2006) 'Learning to use demonstratives in conversation: what do language specific strategies in Turkish reveal?' *Journal of Child Language* 33, 303-320.
- Lewis, G. L. (1967) *Turkish grammar*. Oxford: Oxford University Press.
- Lyons, J. (1977) *Semantics* 2. Cambridge University Press.
- Özyürek, A. (1998) 'An analysis of the basic meaning of Turkish demonstratives in face-to-face conversational interaction' In Santi, S., Guaitella, L., Cave, C. and Konopczynski, G. (eds.) *Oralité et Gestualité: Communication multimodale, interaction*, 609-614. Paris: L'Harmattan.
- Peters, Ludwig (1947) *Grammatik der Türkischen Sprache*. Berlin: Axel Juncker Verlag.
- Underhill, Robert (1976) *Turkish grammar*. Cambridge: The MIT Press.

用例出典

- Öğüt, T. Yılmaz (2004) *100 Diyalog*. Mitos Boyut Yayınları.
- Türkali, Vedat (2004) *141. Basamak*. Gendaş Kültür.

Eldem, Burak (2004) *Seni Tulsımlar Korur*. İnkılâp Kitabevi.

Turkish Demonstratives — Focusing on “şu” Series —

BALPINAR, Metin

Okayama University

Abstract

Modern Turkish has three demonstratives; “bu”, “şu” and “o”. In recent years several studies have been conducted, aiming at making clear the semantic functions of these pronouns (or adjectives) by systematically dealing with their usage. However, it doesn't seem precisely possible that we can explain the variety of use regarding “şu” in terms of the ideas in those studies. In this paper, by extending our data analysis of “şu” toward its exceptional usage, we aim at giving a more comprehensive explanation to multi-meaning of “şu”. And it will also be claimed that “şu” is not only a time-related proximal demonstrative but also it is a demonstrative that encodes psychological proximity.

Keywords: Turkish, demonstratives, common space, psychological distance, time